

日本も元気にする青年海外協力隊 ⑩ 岐阜県

ここにはインタビューの一部のみが掲載されています。全文は以下のURLで公開しています。

URL >>> <https://www.jica.go.jp/chubu/enterprise/volunteer/index.html>

>>> Interview 01



人の力を実感した2年間。 価値観やものの見方を大きく変えた。

大垣市上石津地域事務所長
豊田 富士人 さん

2年という短い期間ではありましたが、ここでは言い表せないほど以後の人生に多くのそして大きな影響を与えています。一番大きなものは価値観やものの見方でしょうか。結局は自分が経験して得たことを基にした物差しで計っているだけで、人によって、さらに経験の蓄積や時勢によって変わるということです。現地で生活するうちに、今まで思いもよらなかったことを考えたり、体験することが出来ました。以降私の中の物差しは、一つではなく複数の色々なものがあり、さらにそれは伸び縮みできるようになっています。また、言葉も文化も風習も自身の取り巻く環境が急に変わってもそれなりに生活でき、次第に快適になるなど、人の適応能力の高さに改めて驚かされました。さらに「一人の人間が物事を進めることは小さいが、多くの仲間が進めれば大きなことが出来る反面、一人の人間が進めることも大きなことが出来る」など、人の影響力の大きさを実感しました。



派遣国 ジンバブエ(土木施工)
派遣期間 1995.04~1997.03

>>> Interview 02



派遣国 エルサルバドル(理数科教師)
派遣期間 2002.07~2004.03



頼りにされない辛さを初めて経験し、 物事に向きあう姿勢を学んだ。

岐阜県立国際たくみアカデミー
森 保 さん (岐阜県岐阜市在住)

文字通り世界が広がったこと、ファミリア(家族)を大切にすることやアマグループ(親切)に人と接することやボランティアの大切さも任国での経験で深まりました。しかし何よりも、任国に行ってから半年間の体験が大きかったです。教員経験も長く、専門の勉強も十分やってきたという自負がありましたが、言葉が子どもにも扱われませんでした。まったくあてにされない、頼りにされないことの辛さを初めて経験しました。後で考えれば当然なのですが、5歳児なみの会話しかできない人にも教わりたくはないものです。言葉がある程度できるようになってからは、人から頼まれたことは全力で行い、人から頼りにされるためにはどうするかを常に考えて、より積極的に仕事をするようになりました。それは日本に帰ってきてからも継続し、人からあてにされる人間になりたいと常にさらに前向きに仕事をするようになりました。

>>> Interview 03



人とのつながり、 お互いを受け入れることの大切さを痛感。

ヤマハ音楽振興会 システム講師
山田 幸代 さん (岐阜県各務原市在住)

協力隊として過ごした日々、周りの人や環境に自分が支えられていることをあらゆる場面で感じていました。もちろん派遣前も現在もそれは同じですが、1人で異国へ降り立ち、迎えてもらったその日から帰国する日までの2年間、本当に多くの現地の人々や隊員仲間助けられ、人の優しさ、温かさを身にしみて感じる機会がたくさんありました。人種や文化の違いはあっても、人と人とのつながりは同じであり、その中で自分自身にできることは何か考え行動し、必要な時には人を頼り学び、お互いを受け入れていくことの大切さを痛感しました。何もなければ世界は広がらない。失敗や遠回りと思われることも、その過程には意味があり全て次につながる。何でも自分で見て感じて経験すること、行動することができて、初めて本当の自分の財産として残っていくのだと思うようになりました。



派遣国 セントビンセント(音楽)
派遣期間 2008.01~2010.01

>>> Interview 04



二度の隊員経験を通して、 物事の捉え方が前向きに。

服部 貴紀 さん

私は青年海外協力隊としてタンザニア理数科教師とキルギス共和国ラグビー隊員という、二度の隊員経験があります。隊員経験を通して、物事の捉え方が前向きになったと感じます。日本にいた頃は、予定通りにいかないこと、上手くいかないことに対してストレスを感じていました。タンザニアではボレボレ(ゆっくりゆっくり)の精神を大事にする文化であり、何か予定どおりにいかなくても、焦ったり怒ったりしません。そのような文化に触れ、起こった出来事は変えられない、しかしその受け取り方は自分で決めることができる。と考えるようになりました。

派遣国 キルギス(ラグビー)
派遣期間 2014.01~2016.06



派遣国 タンザニア(理数科教師)
派遣期間 2010.01~2012.01

>>> Interview 05



派遣国 ラオス(プログラムオフィサー)
派遣期間 2011.06~2013.06

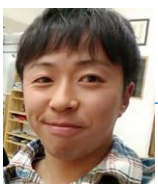


協力隊の活動を通じて学んだ、 やる気にさせる仕掛けづくり。

岐阜経済大学経済学部准教授
有森 俊文 さん (岐阜県大垣市在住)

2年間の経験を通して学んだことは数多くありますが、今の仕事で特に役立っているものは、「努力がしやすい環境づくりの構築方法」です。私は行政機関の中で活動していたため、職務に対する向上心が希薄な人に指導する機会がしばしばありました。協力隊員は、配属先の人たちと利害関係が全くないため、何か改善努力を示唆しても清々しいほどに相手にされません。「楽しんで給料を貰いたい」というわけですが、しかしその一方で「今できないことができるようになりたい」という気持ちから隊員の派遣要請に至ったことも確かです。そのねじれに向き合い、「つらいことは嫌だけど、少し興味はあるし、うまくできそうな気もするし、試しにちょっとやってみよう」という気持ちにさせるための仕掛けづくりが私の活動であり、活動を通して学んだことでもあります。教育に携わっている現在では、とりわけ学生指導の場面でこの学びを生かしています。

>>> Interview 06



子どもにとって大切なことは何か、 考える機会に。

岐阜県各務原市立那加第二小学校講師
山根 大典 さん (岐阜県各務原市在住)

価値観によって子どもの物事に対する姿勢が違うということと同時に、ブータンの子どもの良さ、日本の子どもの良さが分かったことです。ブータンの子どもは仏教の思想の「足るを知る」を大切にしているので、現状で満足しようとしています。例えば、スポーツをしても、他の人より上手くなってやるという気持ちを持つ子どもは少なく感じます。一方、日本でスポーツをやっていると、向上心が高い子どもがとて多めと感じます。私も中学生時代サッカーに打ち込み、毎日そう思っていました。それらのことから、それぞれの良さが分りました。大切なのは、どのような姿勢で物事に臨むかを将来的に自分で決められることだということを感じました。

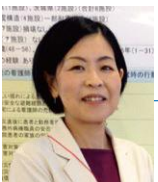


派遣国 ブータン(小学校教諭)
派遣期間 2011.09~2013.09

>>> Interview 07



派遣国 パラガイ(看護師)
派遣期間 2012.06~2014.06



「外国人」を経験した私にできることを 実践していきたい。

中部大学 生命健康科学部保健看護学科
木村 裕美子 さん (岐阜県可児市出身)

赴任地は日本人やアジア人の風貌を持つ人がまったくいない地域で、最初の数ヶ月は珍しいものを見るような現地の人々の視線をつらく感じていました。しかし、職場である診療所で血圧測定や検尿などできることを見つけて取り組むうちに次第に声を掛けてくれる住民が増え、「ユミコに血圧測定してほしい」と指名までしてくれる患者さんが現れるようになりました。日々の丁寧な対応や説明など日本では当たり前には実施している看護サービスが世界に通用することを実感しました。何よりつたないスペイン語しか話せない私にホストファミリー、職場や地域の人は根気よく付き合ってくれました。彼らの助けがなければ、私の活動は何一つまよひがなかったと思います。帰国して、私の周りにも外国人や外国にルーツを持つ人が多いことに気づきました。その人たちが日本で暮らしやすいように、「外国人」を経験した私にできることを考えて実践していきたいと思っています。

>>> Interview 08



最も大切なことは信頼を築くこと。 国際協力における姿勢を学んだ。

岐阜県立岐阜高等学校教諭
(一社)岐阜県水泳連盟副理事長
糸井 紀 さん (岐阜県岐阜市在住)

私は南米エクアドルのスポーツ連盟に勤務し、水泳の代表選手の指導およびコーチの資質向上事業を行いました。当初なかなか私のトレーニングの考え方が浸透しませんでした。しかしそれは私に「知識や技術を教えてあげよう」という上からの目線があったからでした。それに気づいた私は反省し、まずは彼らと仲間になることを優先しました。仕事だけでなくプライベートでも彼らとともに過ごすことによって少しずつ信頼され仲間と認められることができ、それから私の考えがチームに浸透するようになりました。このことから国際協力は知識や技術を与えることだけでなく、ともに時間をかけ信頼を築くことが最も大切だということ学びました。現在その縁で2020年の東京オリンピックの事前合宿を岐阜で開催したいとエクアドルとその近隣数か国が申し出てきています。水泳を通じて岐阜と様々な国が結びついていくことをとてもうれしく思います。



派遣国 エクアドル(水泳)
派遣期間 2013.07~2015.03

>>> Interview 09



派遣国 カンボジア(コミュニティ開発)
派遣期間 2014.01~2016.01



協力隊への参加が、 国際協力に携わる仕事への第一歩に。

JICA中部国際センター 連携推進課(企業連携担当)
谷口 沙樹 さん (岐阜県大垣市在住)



まず、青年海外協力隊に参加したことで今の仕事に直結したかと思えます。協力隊に参加していなかったら今の仕事には絶対に就くことができなかったのです。中学の頃から漠然と国際協力に係る仕事に就きたいと思っていて、中でもODAを扱うJICAに何らかの形で関わっていければと考えていたのですが、まさか本当に実現するとは思っていませんでした。また、二年間の開発途上国の僻地での経験は、自身の人格的にも大きな影響を及ぼしたようです。帰国直後に妹から、「借りたいになったね。」と言われたことがあります。かわいい雑貨や洋服が好きだった私をショッピングに連れ出してくれたのですが、全く興味を示さなくなった私を見て思ったそうです(笑)。モノにあふれた生活から、モノはないけど精神的に充実した環境に浸っていたからこそ、どんなことにも焦らず動じず、周りの目気にせず自分のペースで物事を多角的に考える力がついたらかなと思っています。それは今の仕事にも役立っていますし、今後の自身の人生を有益なものにする欠かせないものであると感じています。

>>> Interview 10



青年海外協力隊として活動した2年間で、 広い視野で物事を考え、感じられるように。

美濃市役所
田淵 亜未 さん (岐阜県関市在住)

青年海外協力隊員として活動した2年間は、日本の職場ではなかなか経験できない学校の授業や研修の企画・実施など、自分の思いついたアイデアを形にすることができた。現在の仕事でこれらの経験を生かす機会はないが、日本にいる自分と海外にいたときの自分、広い視野で物事を考えられるし、感じられるようになった。帰国して1年が経った。これまでの経験がいつ、どういった形で生かされるかわからないが、そのために感性を研ぎ澄まし、日々経験を積んでいきたい。



派遣国 グアテマラ(環境教育)
派遣期間 2014.03~2016.03